



あっとわんは子育て支援の団体です。親と子のエンパワメントを応援しています。 2013年8月23日発行 46,370部

子どもの社会性を伸ばそう



「子どものほめ方叱り方のコツ」という講座を通じて、子育て中のママたちの「いま」を強く感じています。少子化の世の中で、小さいころから思い切りお友達と関わる機会も減っています。子どもの社会性を伸ばすために親ができることは何でしょう？

今回は、国立教育政策研究所総括研究官 滝 充 さんの小学生の社会性を伸ばすという『CS 研レポート』Vol.58、2006 年の文章をもとに、小さい子どもの現状にあてはめて解説したいと思います。ここでは、小学生の社会性を伸ばすというテーマの文章ですが、その前の乳幼児期に必要なことがあるのです。

「問題を起こさない=道理がわかっている=育てている」
今、学校に問われているのは、問題を繰り返す「特別な子どもへの対応」ではなく、もちろん「できる良い子どもへの対応」でもない。残る「大多数の子どもへの教育」なのである。



乳幼児の時期の子ども同士の関わりは、まだまだ未熟な部分があります。自分の思いのままに行動するため、おもちゃを取りに行ったりすることもしばしばです。親の手を煩わせないことが、良い子だということではないのです。

都市化や少子化の進展やテレビゲーム、パソコンなどの普及などにより、大勢で遊ぶ、友人と語り合う、他人と協力し合うといった多様な人間関係の中で、社会性や対人関係能力を身につける機会が減っており、学校や地域社会といった本来社会性を育成する場で社会性が育まれにくくなっている。だとしたら、最も自然な解決法は「そうした機会を増やすこと」に他ならない。



いじめ問題に敏感になるあまり、乳幼児期から心配される方も多々あります。しかし、人として成長していく過程で、さまざまな経験をしていくことはとても大切です。特に、乳幼児期の体験は、小学校以降の人間関係に大きく影響していきます。過剰な心配よりも、子どもの経験値を増やすことがとても大切です。

たとえば「お世話をする一される」という異年齢の関係から年長者が獲得する「認めてもらえて嬉しかった」「役に立ててよかった」「必要とされていると感じた」等の感覚。私はそうした自信や誇りの感覚を「自己有用感」と呼んで重視している。それがあれば、少々面倒だったり大変だったりしても、子どもは自ら進んで他者と交わろう、社会と関わろうとするからである。他者なしでも成立する自尊感情や自己存在感と異なり、「自己有用感」は他者の存在や他者との交流を前提にして生まれる。だからこそ、「社会性の基礎」となって、他者に対する配慮や集団に対する責任感、きまりを守って行動しようとする自覚等にも結びついていく。



年齢を重ねるごとに、人間関係は複雑になっていきます。積極的に関わり、気づいていくこと、さらに、小さな傷つき体験は思いやりや人の気持ちがわかることにもつながっていきます。大きなダメージを受けるのではなく、ちょっとした悲しい経験や嫌な経験もとても大切です。自分の感情をありのままに受け止めることができるよう、乳幼児期の経験を大人は見守っていかるといいのではないのでしょうか。

あっとわんからの提案

子ども自身が持っている「よくなりたい」という思いや力を積極的に活かし伸ばそうとするためには、大人主導や大人の価値観や感覚で決めつけることが悪い影響になることがあります。要するに、子どもが育つ機会を奪っていることに気づかない現状になっているのです。たとえば、乳幼児期の「おもちゃの取り合い」は社会性を学ぶ大切な経験です。しかし、現実としては、なかなかできないわけです。子どもの社会性を伸ばす機会としての「おもちゃの取り合い」が存分にできる環境を設定することも必要だと感じています。

そこで、東部子育てセンターでは、来所される方に了解を得て、あらかじめ告知をしたうえで、「社会性を育てるおもちゃの取り合いタイム（仮称）」のような機会を設ける予定です。ただし、最低限の安全管理は保護者をお願いします。

あっとわんの Facebook ページができました！
<http://www.facebook.com/npoatone>

イベントなどの様子をアップしています



いいね！
してね！

あっとわんのホームページが新しくなりました！
<http://npo-atone.jimdo.com>